

## 資料紹介

# アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄（後編）・ 戦後復興期の日本の子どもの替え唄

— 笠木透の替え唄研究 その2 —

鶴野 祐介

## <緒言>

本誌 644 号に引き続き、笠木透の替え唄研究を紹介する。今回は「アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄」のうち、「A. 軍歌」を元歌とするものを紹介したが、今回は前半において、軍歌以外のジャンル「B. 唱歌・童謡」「C. 流行歌」「D. その他」を元歌とするものを紹介し、後半では、戦後復興期とされる 1950 年代終わり頃までの日本の子どもの替え唄を、元歌のジャンルによる分類はしないで一括して紹介する。

前半部の出典は、前回と同様 3 種類に大別される。第 1 に、笠木 (1995) 『昨日生れたブタの子が戦争中の子どものうた』に掲載された替え唄テキスト、第 2 に、笠木 (1995) ならびに笠木 (2014) 「戦時下の子どもがうたった歌—『海にカバ 山にカバ』」(『子どもの文化』2014 年 7 + 8 月号所収) の文末に参考文献として紹介されていた書籍に掲載されたもの、第 3 に、前掲『昨日生れたブタの子が』出版後、笠木の呼びかけに応じて読者が寄せたもの(「笠木 (1995) への投稿」)である。

後半部の主な出典は、笠木 (1995) および同書への投稿、中沢啓治『はだしのゲン』第 4 巻～第 10 巻、笠木が参照したと思われる有馬敲『替歌研究』(2000)である。

次に、本稿の構成および体裁は以下の通りである。

- ・題名の前に、全てのジャンルにまたがる通し番号を (1)、(2)、……のように振った。題名の後にその歌の発表年と作詞者を挙げ、原則として 1 番の歌詞のみを挙げた。
- ・替え唄は、出典の出版年の古い順に、バージョン (異型) ごとに小文字アルファベットを a. b. ……のように振った。歌詞の後に出典を記載し、複数の文献に同一のバージョンが掲載されている場合には古い順に列挙した。漢字の用法や仮名遣い、空白や改行などは原則として出典に準拠し、複数ある場合には古いものに準拠した。
- ・その替え唄の成立・普及の状況や背景を理解する上で参考となる解説を適宜付した。

## ＜テキスト紹介＞

### I. アジア太平洋戦争中の日本の子どもの替え唄（後編）

#### B. 唱歌・童謡<sup>1)</sup>

##### (1) 「一月一日」(1893年、詞：千家尊福)

年の始めの<sup>ためし</sup>例として／終わりなき世のめでたさを／松竹たてて門ごとに／祝う今日こそ楽しけれ

- a. 年のはじめのためしとて／おわり名古屋の大地震／松竹ひっくり返して大さわぎ／いもを食う  
こそたのしけれ（鶴見・加太 1962：256）
- b. 年のはじめの ためしとて／せっかく着かえた ズロースに／小便たれて 大騒ぎ／あとの始  
末は 誰がする（奥田 1969/2001：202、鳥越 1998：48）
- c. トーフの始めは豆である／おわり名古屋の大地震／松竹ひっくり返して大さわぎ／イモを食う  
こそ屁が出るぞ（川崎 1994：278、笠木 1995：10）
- d. 年の始めのコエかつぎ／尾張名古屋の大地震／マツタケでんぐり返して大さわぎ／あとの始末  
は誰がする（橋本 1994：38、笠木 1995：10）
- e. 年の始めに モチくうて／おわりなきよに 下痢をして／松竹ひっくり返して大さわぎ／祝う  
今日こそ悲しけれ（笠木 1995：10）
- f. 年の始めに嫁もろて／尾張名古屋で子を生んで／松竹タケ子と名をつけて／祝う今日こそ誕生  
日（赤穂市－笠木 1995 への投稿）
- g. 年の始めに嫁に行き／尾張名古屋で子を生んで／松竹太郎と名をつけた／今日のはめでたい誕生  
日（岐阜県神岡町－笠木 1995 への投稿）
- h. 年の始めは豆ですよ／尾張名古屋の大地震／松竹ひっくり返って大さわぎ／あとの始末はだれ  
がする（鳥越 1998：43）

——「『一月一日』(略)は元旦に宮中で行われる四方拝(早朝、天皇が四方の諸神・山陸を拝し、五穀豊穡、天下太平などを祈る儀式)を祝う歌で、明治のころから小学校で元旦の式のときに歌うことになっていました。実に厳かな歌だったわけです。ところが、この替え歌のほうは、その厳粛をひっくり返す小気味よさがあって、私たち小学生はうれしがって歌いました。元歌よりこちらの替え歌を歌った回数の方が多かったと思います」(川崎 1994:278)。「紅白まんじゅうをもらい、ぼくらは、この替歌をうたいながら家に帰って行きました。意味も分からない教育勅語を、無理やり、不自然な姿勢で聞かされた反動で、ヤケクソ半分でこの替歌を大声でうたったものでした」(笠木 1995:11)。

##### (2) 「うさぎとかめ」(1901年、詞：石原和三郎)

もしもしかめよ かめさんよ／せかいのうちで おまえほど／あゆみののろい ものはない／どう

### してそんなにのろいのか

- a. もしもしかめよ 毛が生えた／せかいのうちに 毛が生えた／あゆみののろい 毛が生えた／  
 どうしてそんなに 毛が生えた (川崎 1994 : 283、有馬 2000 : 209)
- b. もしもし〇〇よ 〇〇さんよ／せかいのうちに おまえほど／あたまのわるい ものはない／  
 どうしてそんなに わるいのか (鳥越 1998 : 55)

——a は 1930 年生れの川崎洋が小学生の頃歌っていたという。一方、b は 1929 年生まれの鳥越信が  
 子どもの頃に歌っていたという。

### (3) 「牛若丸」(1911 年、『尋常小学唱歌』)

京の五条の橋の上 大のおとこの弁慶は 長い<sup>なぎなた</sup>薙刀ふりあげて 牛若めがけて切りかかる

- a. 京の五条の橋の下／大の男のルンペンは／長いふんどしぶらさげて／ちり箱めがけてとびかか  
 る (有馬 2000 : 353)

——「替歌は『橋の上』を『橋の下』に歌い替え、弁慶を当時の野宿者に置き換えた」(同上 353)。

### (4) 「おかあさん」(発表年不明、詞：鹿島鳴秋)

おかあさん おかあさん／おかあさんてば おかあさん／なんにもごようは ないけれど／なんだ  
 かよびたい おかあさん

- a. ゴハンちゃん ゴハンちゃん／ゴハンちゃんたら ゴハンちゃん／いっぱい<sup>ごよう</sup>御用はあるけれど  
 ／来てもくれないゴハンちゃん (奥田 1969/2001 : 280、鳥越 1998 : 135)

——「戦争が子どもたちに強要した多くのつらさの中で、「飢え」は食べざかり、育ちざかりの子ど  
 もにとって、最高のつらさだった。この替え歌には、その切なさがしみじみとこめられていて、二  
 度と戦争はごめんとのおいをいっそう強くするのである」(鳥越 1998 : 136)。

### (5) 「靴が鳴る」(1919 年、詞：清水かつら)

お手<sup>てて</sup>つないで野道を行けば／みんな可愛い小鳥になって／唄をうたえば靴が鳴る／晴れたみ空に靴  
 が鳴る

- a. お手テンプラ食べすぎて／エノケン先生にみてもろた／ああもうだめだ／肺炎・肋膜炎・十二指腸  
 ／あしたは悲しいお葬式／葬式まんじゅう出るだろか (鳥越 1998 : 98、有馬 2000 : 355)
- b. お手テンプラ つないデコちゃん／野道を行け バリカン／みんなかわいい (カッパ) ／コン

ニヤクまるめて ラッパ／ハゲた頭に トンボがとまる（有馬 2000：355）

- c. お手テンブラつないデコチン／野道をゆけバリカン／皆かきくけコンニャク／煮豆にらっきょ  
／うたをうたえば 腹がヘルンペン（有馬 2000：355）

(6) 「桜井訣別（青葉茂れる桜井の）」（1899年、詞：落合直文）

青葉茂れる桜井の／里のわたりの夕まぐれ／木の下蔭に駒とめて／世の行く末をつくづくと／忍ぶ  
鎧よろいの袖えの上に／散るは涙かはた露か

- a. アホな茂ちゃんさくじつ昨日は／いろいろお世話をかけました／私はこんどの日曜日／東京の女学校を  
スベります（阪田 1990：95）
- b. 青葉茂ちゃん昨日は／いろいろお世話になりました／わたくし今度の日曜日／東京の女学校へ  
まいります／皆さんよくよくお勉強／なさって下さい頼みます（山口県、川崎 1994：286、鳥越  
1998：53）

——「本歌ができたのは明治 32 年だが、替歌の歌詞は昭和初期・大阪製のにおいがする」（阪田 1990：  
95）。「これは出だしだけが元歌をもじり、あとは自由に作詞されたケースで、こういう替え歌も  
あるわけです。お手玉歌でひろく全国で歌われていたものようです」（川崎 1994：286）。「全体の  
文脈が手紙文になっているのが大きな特色で、多分これは小学校の六年生あたりで女生徒のみに  
課せられていたペン習字と無関係ではないだろう。そのためか、この替え歌は圧倒的に女の子の  
あいだで歌われていた…（後略）」（鳥越 1998：53）。

(7) 「証城寺の狸囃子」（1924年、詞：野口雨情）

証、証、証城寺／証城寺の庭は／ツ、ツ、月夜だ／皆出て来い来い来い／己等の友達ア／ぼんぼこ  
ぼんのぼん

- a. ポ、ポ、ポパイ／ポパイのおなら／セ、セ、世界で／一番くさい／お窓をあければ／黄色い煙  
がポッポッポ（鳥越 1998：113）
- b. 処、処、処女でない／処女でない証拠には／ツ、ツ、月のものが／三月も出ない／おまけにお  
なかが／ぼんぼこぼんのぼん（鳥越 1998：113）

(8) 「スキー」（1942年、詞：時雨音羽）

山は白銀しろがね 朝日を浴びて／すべるスキーの 風切る速さ／飛ぶは粉雪こゆきか 舞い立つ霧か／おお こ  
の身も駆けるよ駆ける

- a. 朝の四時ごろ空から弁当上げて／家を出ていく親父の姿／ズボンはボロボロ モモヒキはいて／  
あゝあわれな親父の姿（笠木 1995：23）

- b. 朝の四時ごろ空弁当下げ／家を出ていく親父の姿／パンツはボロボロ 中身が見える／あゝあわれな親父の姿 (笠木 1995 : 23)
- c. 朝の四時ごろ べんとう箱さげて／うちを出ていく おやじの姿／靴は底抜け (ボロボロ) 地下たびはいて／帽子も底抜け 頭 (顔) は百ワット (有馬 2000 : 356)
- d. 朝の五時ごろ べんとう箱さげて／どこへ行くのか 半熟先生 (うちを出ていく おやじの姿)／べんとうのおかずは 梅干し一個 (べんとうの中身は 麦飯こんこ)／持つてるお金は おもちゃの一円 (おおお 哀れな おやじの姿) (有馬 2000 : 356)

——「戦争中から戦後にかけてうたわれた替歌の中で、この歌ほど、ほくらをはげまし、心をいやし、明日に生きる希望をあたえてくれたうたを、今のところ、他にほくは知らない」(笠木 1995 : 23)。

(9) 「港」(1896年、詞：林柳波・旗野十一郎)

空も港も夜は晴れて／月に数ます船のかげ／<sup>はしけ</sup>解のかよい賑やかに／寄せ来る波も黄金なり

- a. ドレミっちゃん耳だれ目はやんめ／あたまの横っちょに禿がある／蠅がとまればちよいとすべる／ほんとに便利な禿あたま (加太 1971 : 10、鳥越 1998 : 49)
- b. ドレミっちゃん鼻かげ目はめっかち／頭の横っちょにはげがある／はえがとまればちよいとすべる／ほんとに便利なはげ頭 (岩井 1987 : 42、鳥越 1998 : 49)
- c. ドレミっちゃん耳だれ目は病ン目／頭の横っちょにはげがある／よくよく見れば毛が三本／見れば見るほどいい頭 (鳥越 1998 : 49)

——「『ドレミっちゃん』という歌いだしは、明治の中頃から昭和十年を超えるあたりまで、日本の音楽教育が『ドレミファソラシド』の音階を使っていたことからきている。つまりこの歌の音階は『ドレミミソラソソ』と始まっていたので、当時の子どもたちは歌詞とともに、音階による歌も歌っていたわけである。それ以前の初期には『ヒフミヨイムナヒ』が使われ、戦時中、私たちが子どもの頃には『イロハニホヘトイ』が使われていた。したがってこの替え歌の誕生は『ドレミ』が使われていたあいだと限定できるが、その物珍しさが強かった使われはじめの頃と考えるといいのではないだろうか」(鳥越 1998 : 51)。

(10) 「夕焼小焼」(1923年、詞：中村雨紅)

夕焼小焼で日が暮れて／山のお寺の鐘が鳴る／お手手つないで皆帰ろ／鳥と一緒に帰りましょう

- a. 夕焼小焼で日が暮れない／山のお寺の鐘鳴らない／戦争なかなか終わらない／鳥もお家へ帰れない (木乃美 1988 : 87、笠木 1995 : 20)

——「この替歌も、鐘があったのに、ないという事実をうたうことから始めて、反対表現をどの

行にもあてはめただけの、言葉あそびから生れたセオリー通りの替歌だが、たった四行で見事な替歌が出来あがった。こんなにも短く、こんなにも鋭く、あの戦争を表現した歌を、ほかにぼくは知らない」（笠木 1995：21）。

(11) 「われは海の子」(1910年、作詞者不詳)

我は海の子白浪の／騒ぐ磯辺の松原に／煙たなびく 苦屋こそ／我が懐かしき住家なれ

- a. われはノミの子シラミの子（以下不明）（阪田 1990：96）
- b. 我はノミの子シラミの子／生まれたばかりでつぶされた（鳥越 1998：61）
- c. 我はノミの子シラミの子／さわぐ夜中の床の中／かゆいかゆいという人は／我がなつかしき住み家なれ（鳥越 1998：62）

### C. 流行歌

(1) 「湖畔の宿」(1940年、詞：佐藤惣之助)

山の寂しい湖に／ひとり来たのも悲しい心／胸の痛みに堪えかねて／昨日の夢と焚きすてる／古い手紙のうす煙り

- a. 昨日 召されたタコ八が／今日のいくさで 名誉の戦死／タコの遺骨（遺体）はいつ帰る／骨がないから帰れない（無着成恭が歌った。加太 1965：90、倉本 1984：31）
- b. ランプひきよせ しらみとり／糸のぬい目を よくよく見たら／でるわでるわ ぞくぞくと（以下不明）（長野県岡谷市の紡績女工の寄宿舎の歌－加太 1965：92）
- c. 昨日召された蛸八は／弾丸に当たって名誉の戦死／蛸の遺骨はかえらない／骨がないからかえれない／蛸のカアチャン（かあさん）寂しかろ（悲しかろ）（高橋 1969：150、岐阜県神岡町－笠木 1995 への投稿）
- d. 昨日生れた豚の仔が／蜂にさされて名誉の戦死／豚の遺骨はいつ帰る／四月八日の朝帰る／豚の母さん悲しかろ（稲垣 1976/1994：139-140）
- e. 昨日生れた蜂の子が／豚に踏まれて名誉の戦死／蜂の遺骨はいつ帰る／四月八日の朝帰る／蜂の母さん悲しかろ（稲垣 1976/1994：140）
- f. 硯ひきよせ故郷の／いろいろ便りを戦地に送る／主は離れた南の小島／弾に当って名誉の戦死／主の遺骨はいつ帰る（稲垣 1976/1994：146）
- g. キノフ生マレタ豚ノ子ハ／蜂ニ刺サレテ名誉ノ戦死／豚ノ遺骨ハ何時還ル／五月五日ノ夜還ル／豚ノ母チヤン淋シカロ（山中 1982：252）
- h. 昨日生れたブタの子が／ハチに刺されて名誉の戦死／ブタの遺骨はいつ帰る／昨日の夜の朝帰る／ブタの母ちゃん悲しかろ（笠木 1995：18）
- i. 昨日生れたブタの子は／ハチに刺されて名誉の戦死／ブタの遺骨はいつ帰る／明日の三時ごろ（以下不明）（桐生市－笠木 1995 への投稿）
- j. 昨日生れたハチの子が／ブタにふまれて名誉の戦死／ハチの遺骨はいつ帰る／八月八日の朝帰る

／ハチの母ちゃん悲しかろ（笠木 1995：18）

- k. 昨日生れたタコの子が／タマにあたって名誉の戦死／タコの遺骨はいつ帰る／骨がないから帰れない／タコの母ちゃん悲しかろ（笠木 1995：18）
- l. ランプ引き寄せシラミ取り／シャツの縫い目を静かに開けば／シラミ五、六匹うようよと／それをつかまえ相撲取らせ／負けた奴からひねり潰す（逗子市－笠木 1995 への投稿）
- m. ランプ引き寄せシラミ捕り／シャツの縫い目をよくよく見れば／シラミ五、六匹ゴロゴロと／それを集めて相撲取らせ／負けた奴からひねり潰す（太平洋戦争中、秋田で歌われた－有馬 2003a：288）
- n. ランプ引き寄せシラミとり／搔いて又搔くインキンタムシ／旅の先でもさつま芋／腹の中ではガスタンク／何時か放そう宿の中（笠木 1995 への投稿）

——「『きのう生まれたたこ八が』って歌があるでしょう。（中略）あれは、数ある替歌の中の名作だと思うんです。あの中には<sup>ひょうびょう</sup>縹渺とした感じがあって、なんか戦争を遠く遠く見ている、そういう感じがあると思うんです」（鶴見 1962：291）。元歌とは全く異なる歌詞がどのような経緯で生まれこの曲に付けられたのか不明。ただし、有馬敲によれば、a に登場する「タコ八」とは田河水泡の新聞連載漫画『蛸の八ちゃん』（1931～1937）に由来するとされる（有馬敲 2003b：29）。タコには骨がないから遺骨は帰ってこないと歌われるが、戦争末期になると遺族の元に送られた白木の箱に遺骨が入っていないことが実際に多かった。元歌に対してではなく、戦死を賛美する現実世界の風潮に対しての「ナンセンス」と「反転」が効いている。また、同じ言葉（ブタ、ハチ、タコ）の「固定」も見られる。さらに、ブタやタコはユーモラスな存在として描かれることが多く、これらが登場することで、わが子を奪われた母親の哀しみ、やるせなさが逆に際立っている。笠木は「戦争中の替歌史上、名作中の名作」（笠木 1995：19）と絶賛する。

(2) 「シャンラン節」（1943 年、詞：村松秀一）

薫るジャスミン どなたがくれた／パパヤ畑の月に問え 月に問え／ツーツーレロレロ ツーレロ／ツレラレトレ ツレトレシャン／ツレラレトレ シャンランラン

- a. ルーズベルトの ベルトが切れて／チャーチル散る散る／花と散る花と散る（笠木 1995：16）
- b. 東條英機のつる禿頭／ハエがとまれば／チョイトすべるチョイトすべる（笠木 1995：16）

(3) 「隣組」（1940 年、詞：岡本一平）

とんとんとんからりと 隣組／格子を開ければ 顔なじみ／廻して頂戴 回覧板／知らせられたり知らせたり

- a. トントントンカラリと 隣組／格子を開ければ 小母さんが／腰巻まくって シラミとり／見えた見えたよ ケバ見えた（笠木 1995 への投稿）

(4) 「満洲娘」(1938年、詞：石松秋二)

私十六 満洲娘／春よ三月 雪解けに<sup>インチュンホフ</sup>迎春花が 咲いたなら／お嫁に行きます 隣村<sup>わん</sup>／王さん  
待ってて 頂戴ネ

- a. 今は非常時 節約時代／パーマネントは 止めましょう／革靴はかないで 下駄はいて／お嫁に行く時や モンペ姿／アンサン待っててちょうだいネ (鹿児島県、笠木 1995 への投稿)
- b. 今は非常時 節約時代／パーマネントは やめましょうね／憲兵さんが 消えたなら／お嫁に行きます 何処にでも／それまで待っててちょうだいね (笠木 1995 への投稿)

#### D. その他

(1) 「教育勅語」(正式には「教育ニ関スル勅語」1890年発表)

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ (中略) 爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ (中略) 御名御璽

- a. 朕思わず屁をたれた 汝臣民くさかろう 国家のためだ 我慢しろ (東京-笠木 1995 への投稿)

## II. 戦後復興期の子どもの替え唄

(1) 「ああそれなのに」(1936年、詞：星野貞志。映画『うちの女房には髭がある』の主題歌)

空にゃ今日もアドバルーン／さぞかし会社で今頃は／おいそがしいと思うたに／ああそれなのに  
それなのに／ねえ おこるのはおこるのは／あたりまえでしょう

- a. トゥデイ アドバルーン イン ザ スカイ／ナウ パーハックス イン ザ カンパニイ／  
ビジィ ビジィと アイ シンク／アア ネバー ザ レス ネバー ザ レス／ネエ アイ  
アム アングリィ アイ アム アングリィ／イット イズ ナチュラリィ (有馬 2000: 373)

——「カタカナ・イングリッシュで戦時中より学生たちのあいだで歌われた」(同上 374)。

(2) 「一月一日」(1893年、詞：千家尊福)

年の始めの例とて／終わりなき世のめでたさを／松竹たてて門ごとに／祝う今日こそ楽しけれ

- a. 年の始めに モチくうて／おわりなきよに 下痢をして／松<sup>まつ</sup>竹<sup>たけ</sup> ひっくり返して／おおさわぎ  
／祝うきょうこそ悲しけれ (中沢 V: 117、同 127)

——「戦争中の子どもの替え唄」B. 唱歌・童謡 (1) 参照。戦後になっても歌われていた。

## (3) 「牛若丸」(1911年、『尋常小学唱歌』)

京の五条の橋の上 大のおとこの弁慶は 長い薙刀ふりあげて 牛若めがけて切りかかる

- a. 京の五条のオンザブリッジ／グレートマンの弁慶が／ロングなぎなたふりあげて／牛若めがけてカットダウン／／牛若丸はジャンプして／持ったおうぎをピッナンプ／カムカムカムとらんかんの／上えあがってハンドたたく／／前やバックや右レフト／ゼアと思えば又ヒアラ／スワロのようなアクロバットロ／グレート弁慶エクスキューズミー (有馬 2000 : 373)

## (4) 「教育勅語」

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ (中略) 爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ (中略) 御名御璽

- a. 朕<sup>ちん</sup>思わずへをたれた／なんじ臣民くさかろう／鼻をつまんで待避せよ<sup>(ママ)</sup>／ギョメイギョジ／ブス～ン／ただいま電波を食われて故障しました／日本中飢えているのでこまります／これではこれで放送はおわりますさようなら／イヌあっちケー (中沢Ⅶ : 151)
- b. 朕<sup>ちん</sup>はおもわずへをたれた／なんじ臣民くさかろう／鼻をつまんで退避せよ／ギョメイギョジ／アナカシコアナカシコ (中沢Ⅸ : 8)
- c. 朕はたらふく食ってるぞ 汝臣民飢えて死ね (\*戦後、メーデーのプラカード、横浜市-笠木 1995 への投稿)

—— I - D (1) を参照のこと。

## (5) 「銀座カンカン娘」(1949年、詞：佐伯孝夫)

あの娘可愛いや カンカン娘／赤いブラウス サンダルはいて／誰を待つやら 銀座の街角／時計ながめて そわそわにやにや／これが銀座の カンカン娘

- a. あの娘かわいや パンパン娘 (中沢Ⅷ : 237)

## (6) 「草津節」

草津よいとこ 一度はおいで ア ドッコイシヨ／お湯の中にも コリヤ 花が咲くヨ チョイナ チョイナ

- a. 戦争よい事 何回でも起こせ ドッコイシヨ／金のなる木がコリヤ そそりたつよ チョイナ チョイナ (中沢Ⅷ : 164)
- b. クサツ グッドプレイス ワンスタイム カモン ドッコイシヨ／イントウ ザ ホット

ウォーター コーリヤ／フラワ ブロッサム チョイナチョイナ（有馬 2000：374）

——「これも学生のあいだで、和製英語で戦時中より歌われていた。ドイツ語では『ドッカイショ／ツォイナ／ツォイナ』と歌われた」（同上 374）。

(7) 「月月火水木金金」（1940年、詞：高橋俊策）

朝だ夜明けだ潮の息吹き／ぐんと吸い込む<sup>あかがね</sup>銅色の／胸に若さの<sup>みなぎ</sup>漲る誇り／海の男の艦隊勤務／月月火水木金金

a. 朝だ四時半だ 弁当箱さげて／家を出ていく おやじの姿／ひるめしは ミミズのうどん／ルンペン生活 なかなかつらい／<sup>けつけつかいかい</sup>月月火火 ノミがいる（中沢Ⅳ：125、同Ⅴ：64）

——「戦争中の子どもの替え唄」A. 軍歌（6）参照。戦後になっても歌われていた。

(8) 「湖畔の宿」（1940年、詞：佐藤惣之助）

山の寂しい湖に／ひとり来たのも悲しい心／胸の痛みに堪えかねて／昨日の夢と焚きすてる／古い手紙のうす煙り

a. きのううまれたブタの子が／ハチにさされて名誉の戦死／ブタの遺骨はいつかえる／バカが行く行く女郎買いに／青い顔して朝帰り／みやげにもらった淋病で／痛い痛い泣きました（中沢Ⅴ：259、同Ⅵ：8）

b. きのう生まれたブタの子が／蜂に刺されて名誉の戦死／ブタの遺骨はいつかえる／ああ～それはわからない～／ブタよ本当にかわいそう／バカが行く行く女郎買いに／青い顔をして朝帰り／みやげにもらった淋病に／痛い痛い泣きました（中沢Ⅸ：92）

(9) 「ジングルベル」（1857年、作詞作曲：James Piapont）

Dashing through the snow, in a one horse open sleigh,

O'er the fields we go, laughing all the way;

Bells on bob-tail ring, making spirits bright;

What fun it's to ride and sing a sleighing song tonight.

Jingle, bells! Jingle, bells! Jingle all the way.

Oh, what fun it is to ride, in a one-horse open sleigh, Hey!

Jingle, bells, Jingle bells, Jingle all the way!

Oh, what fun it is to ride, in a one-horse open sleigh.

a. イモ食えばへが出るぞ／ズボンが破れるへのちから／ブツブツ～／こらえてもおさえても止ま

らない／／マメ食えばへが出るぞ／パンツが破れるへのちから／ピッピッ～／こらえてもおさえても止まらない／／風呂に入ればへが出るぞ／お湯がこぼれるへのちから／ポッポッ～／こらえてもおさえても止まらない（笠木 1995：36-37）

——「敗戦後は食べるものがなくて、ぼくらはいつもオナカがペコペコだった。空腹が何よりもつらい。ぼくらの脳裏から、あの時飢えた記憶が消えることはないだろう。

ぼくらは大人たちと一緒に、山や原野を開墾し、そこにサツマイモを植えた。サツマイモがとれると、朝食も昼食も夕食もふかしイモ。ハラペコのうちは、それでも満足したが、くる日もくる日もイモとなると、イモを見ただけでゲップが出てくるようになる。あの頃、あまりにもイモを食べすぎたので、大人になってからもしばらくはヤキイモを見ても、手を出さなかったほどに、イモにはアキた。

戦争に負けて、にわかに盛んになったものに、花見と盆踊りと、町民運動会があった。そこにアメリカ文化が入ってくる。クリスマス、サマータイム、パーマネント、ダンス……と。形勢逆転してこんどは、アメリカ一辺倒になっていくのだから、日本人は、エライ。なんというノーテンキ、なんという無節操。

ラジオから「ジングルベル」が流れてくる。「カムカムエブリボディ」も「ジングルベル」も明るい唄だったなァ。

イモばかりたべていると、オナラが出る。へばっかりしていたぼくらは、この「ジングルベル」を替歌にしてしまったのです。

戦争中の軍歌を替歌にしたぼくらは、戦後は、アメリカの歌を替歌にして、自らの暮らしぶりをうたったのです。大人たちの右往左往、責任もとらずに変貌していく姿とくらべると、なんという一本スジを通した生き方でしょう。これ、ぼくも含めて、当時の子どもたちの自画自賛です。笑わば笑え、ハイ」（笠木 1995：37）。

(10) 「元寇」（詞：永井建子）

四百余州をこぞる／十万余騎の敵／国難ここに見る／弘安四年夏の頃（以下省略）

- a. 八百余州の乞食／ザルもって門（かど）に立ち／おっさんゼニをくれ／ザルいっぱいゼニをくれ（中沢Ⅶ：109）
- b. 幾千万人の乞食／椀持って門（かど）に立ち／奥さん飯シンジョ／くれなきゃぶっ殺す（終戦直後の新京市（現在の長春市）で万引き団を組織した少年たちが歌った－笠木 1995 への投稿）
- c. 二〇四人の乞食／銀座のかどに立ち／おっちゃん銭おくれ／くれないとパンチくわす（東京－笠木 1995 への投稿）

(11) 「証城寺の狸囃子」（1925 年、詞：野口雨情）

証、証、証城寺／証城寺の庭は／ツ、ツ、月夜だ／皆出て来い来い来い／己等の友達ア／ぼんぼこぼんのぼん／負けるな負けるな／和尚さんに負けるな／来い 来い来い／来い来い来い／皆出て

## 来い来い来い

- a. カムカムエブリボディ／ハウドゥユドゥエンハウアユウ／ウォンチュウハヴサムキャンディー  
……（笠木 1995 : 36）
- b. Come, come, everybody, /How do you do and how are you? /Won't you have some candy /one  
and two and three, four, five /Let us sing a happy song, /Sing, to-ra-ra-ra-ra!（有馬 2000 : 372）

——「米英音楽を追放せよ、英語を使ってはいけない、と命令した国が、戦争に負けると、どうなるか。ほくら子どもたちは、戦争を指導してきた大人たちや、この国の、あまりの変りように、驚いたのなんのって。世の中に絶対なんてものはないんだ。いつまたひっくり返るか分ったものではない。といった、なんというか、アナーキーとも言える世界観が、ほくらの世代にあるのは、この時代に原因があるようです。

昨日までは天皇は神だったのに、今日からは人間、昨日までは修身があり、習字があったのに、今日からはなし。昨日までは、黙って言うことをきけだったのに、今日からは、何か意見を言え、一などなど、あまりの変貌ぶりに、あいた口がふさがらなかったなァ。

そして1946年（昭和21年）になると、NHKラジオから、英会話のうたが流れだす。（中略）どこかで聞いた曲だと思ったら、「証城寺の狸囃子」だった。野口雨情、中山晋平の曲です。野口雨情は、戦争中、ほとんど詩を書かず、「戦争はうたになりません」と言っていたという。1945年（昭和20年）に永眠したから、この英語の替歌を聞くことはなかった。生きていたらどう思ったことだろう。庶民の心が分る人だったから、出来ることなら、一度聞いてみたいと思うのです。大声で笑いながら、大きな瞳の奥でそうれ見ろ！と言うような気もするのですが」（笠木 1995 : 36）。

「英語の歌は1946年2月より、NHKで『平川唯一先生の英会話教室』として、童謡『証城寺の狸囃し』のメロディにあわせ『カムカム・エブリボディー…』の歌で始った。1945年より、杉山・ハリスほかの『実用英語会話』（9月）、堀越英四郎の『基礎英語講座』（11月）が始っていたが、NHK番組は「カムカム英語」と呼ばれ、当時の英語ブームとあいまって人気を呼び、1951年12月までつづいた」（有馬 2000 : 373）。

(12) 「月」（1911年、作詞者不詳）

## デタデタツキガ、マルイマルイ マンマルイ ボンノヨウナ ツキガ

- a. でたでた山賊が 長い長いやりもって（中沢Ⅵ : 181）

(13) 「東京ブギウギ」（1948年、詞：鈴木勝）

東京ブギウギ リズムうきうき／心ずきずき わくわく／海を渡り響くは 東京ブギウギ／ブギのおどりは 世界の踊り／二人の夢の あの歌／口笛吹こう 恋とブギのメロディー／燃ゆる心の歌 甘い恋の歌声に／君と踊ろよ 今宵も月の下で／東京ブギウギ リズムうきうき／心ずきずき わくわく／世紀の歌心の歌 東京ブギウギ（ヘイ）

- a. 東京ブギブギ 心ズキズキワクワク モチモチモチ 心ノモチ 東京モチモチヤーッ (中沢Ⅴ：132)
- b. 広島麦めし／田舎白米バクバク／世紀の格差／心の格差／広島ブギウギ ヤーッ／ブギウギブギウギー (中沢Ⅷ：92、同Ⅸ：92)

(14) 「一つとせ」(わらべうたであるため、元歌の歌詞は特定できない。)

- a. 一つとせ ひとつもうらやむ わがチンチン ヨイショ／二つとせ ふとくてりっぱなわがチンチン ヨイショ／三つとせ みればみるほど よかチンチン ヨイショ／四つとせ よにもすばらしい わがチンチン (中沢Ⅸ：40-41)

(15) 「兵隊さんよ ありがとう (1939年、詞：橋本善三郎)

肩を並べて 兄さんと／今日も学校へ 行けるのは／兵隊さんの おかげです／お国のために戦った／兵隊さんの おかげです／兵隊さんよ ありがとう

- a. 肩を並べて 兄さんと／今日も買い出し 行けるのも／日本が負けた おかげです／弱い弱いお国のために負けちゃった／兵隊さんのおかげです (笠木1995への投稿)

(16) 「夕日」(1921年、詞：葛原しげる)

ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む／ぎんぎんぎらぎら日が沈む／まっかっかっか 空の雲／みんなのお顔も まっかっか／ぎんぎんぎらぎら日が沈む

- a. マッカッカッカ 空の色／おサルのおけつも マッカッカー (中沢Ⅸ：205)

——「ほいじゃが 大丈夫かのう 心配じゃのう」「なにが マッカッカ元帥のことか」「バカタレ あんちゃんのことじゃ」「ああ 元のことか」(同205)

(17) 元歌不詳その1

- ・金玉は金といえども光りなく／玉といえども丸くなく／日陰においても色黒し／えらくもないのにひげはやし／縫目あってもほころびはなし／チョイナチョイナー (中沢Ⅵ：48、同Ⅷ：49)

(18) 元歌不詳その2

- ・月夜の晩に／火事があって／水をもってこい／木兵衛<sup>もくべえ</sup>さん／金玉おとして／土<sup>ど</sup>ろまみれ (中沢Ⅶ：155)

## 注

- 1) 明治期から昭和初期にかけての学校教育の中で、現在の「音楽」にあたる科目「唱歌」の教科書に収められた作品が「唱歌」と呼ばれ、大正期以降、雑誌やレコードなどのメディアを通して発表された子ども向けの歌謡作品が「童謡」と呼ばれるが、今日では、「唱歌」や伝承の子どものうたである「わらべうた」も含めた「子どものうた」の総称として「童謡」の語を用いる場合もある。

## 引用・参考文献

- ・有馬 2000『替歌研究』KTC 中央出版
- ・同 2003a『替歌・戯歌研究』KTC 中央出版
- ・同 2003b『時代を生きる替歌・考 風刺・笑い・色気』人文書院
- ・稲垣真美 1976『もうひとつの反戦譜』三省堂（家永三郎編 1994『日本平和論大系』15、日本図書センター所収）
- ・岩井正浩 1987『わらべうた その伝承と創造』音楽之友社
- ・奥田継夫 1969/2001『ボクちゃんの戦場』理論社／『奥田継夫ベストコレクション』ポプラ社
- ・長田暁二 1970『日本軍歌大全集』全音楽譜出版
- ・笠木透 1995『昨日生れたブタの子が 戦争中の子どものうた』音楽センター
- ・同 2014『戦時下の子どもがうたった歌 —『海にカバ 山にカバ』』、子どもの文化研究所『子どもの文化』2014年7 + 8月号所収
- ・加太こうじ・柳田邦夫・吉田智恵男 1971『おとなの替歌百年』アロー出版社
- ・加太こうじ 1965『軍歌と日本人』徳間書店
- ・川崎洋 1992『わたしは軍国少年だった』新潮社
- ・同 1994『日本の遊び歌』新潮社
- ・木乃美光 1988『欲しがらないで生きてきた』光文社
- ・倉本聰 1984『いつも音楽があった』文藝春秋
- ・阪田寛夫 1990『童謡でてこい』河出書房新社（河出文庫）
- ・澤地久枝 1989『いのちの重さ 一声なき民の昭和史一』岩波書店（岩波ブックレット No.126）
- ・高橋碩一 1969『流行歌でつづる日本現代史』新日本出版社
- ・鶴見俊輔・加太こうじ他 1962『日本の大衆芸術 民衆の涙と笑い』社会思想社（現代教養文庫）
- ・鳥越信 1998『子どもの替え歌傑作集』平凡社
- ・中沢啓治 1973-1985『はだしのゲン』全十巻（内Ⅰ～Ⅲ巻が戦中期、Ⅳ～Ⅹ巻が戦後復興期）、汐文社
- ・中根美宝子 1965『疎开学童の日記 九歳の少女がとらえた終戦前後』中央公論社（中公新書）
- ・野村章 1991『証言 昭和史の断面 植民地そだちの少国民』岩波書店（岩波ブックレット No.186）
- ・橋本左内 1994『国民学校一年生 ある少国民の戦中・戦後』新日本出版社
- ・船越義彰 1981『なはわらべうた行状記』沖縄タイムス社
- ・山中恒 1982『子どもが少国民といわれたころ』朝日新聞社
- ・同 1985/1989『ボクラ少国民と戦争応援歌』音楽之友社／朝日文庫
- ・同 1986『子どもたちの太平洋戦争 —国民学校の時代—』岩波書店（岩波新書）

（本学文学部教授）